

技術者として起業して 学会特別講演録

中山輝也（なかやま てるや）
株式会社キタック 代表取締役社長

新潟国際情報大学で開催された経営情報学会2014年秋季全国研究発表大会において、株式会社キタック社長 中山輝也様による特別講演が行われました。中山様は、地質学を学んだ技術者として新潟の地に根付いた御活動だけでなく、海外でも御活躍され、数多くの社会貢献活動もされています。このような経緯から、渋沢栄一賞をはじめ、各国から多くの賞を贈られてきました。講演会では、大変ユニークな御経験について事例を交えて興味深くお話を伺うことができ、ここに御講演内容の一部をご紹介します。



しましていただいています。少々横道に逸れましたが。

1. はじめに

本日は、お時間をいただきまして、まことにありがとうございます。これから、私が今まで経験してきたことや考え方をお話したいと思います。

まずは、私どもの会社ですが、主に土木や環境を中心としたコンサルタント業だと考えていただきたいと思います。資本金は5億円弱、従業員は150人くらいです。設立当初は地質、ボーリングと、ちょっとした設計業務が主でしたが、だんだん成長とともに、防災のための情報提供や土木設計、解析評価なども行うようになり、総合的な建設コンサルタントとして発展してきました。

平成10年に、東京店頭（現在のジャスダック）に上場したため、毎日5円上がった、10円下がったなど、一喜一憂している人もいたようです。株価は400円くらいなので、100株単位で買っても4万円です。今でも結構楽しんでいる人が多く、上がると800円くらいになることもあり、そこで売りぬけて儲ける人もいます。しかし、私ども経営者はインサイダーになるので、そんなことは全くできません。起業してから考えられなかった話で楽

2. 防災への取り組み

2.1 防災に必要な3つの情報

それでは、私どもの会社が防災のための情報をどうやって使っているのかについてご紹介したいと思います。自然災害に対する防災・減災に必要な情報は何かと言いますと、まずは災害発生時の情報で、被害情報・(河川) 氾濫情報・土砂災害情報・噴火情報などです。2番目は、災害発生に備えた情報として危険箇所情報であり、これは避難経路の確保や弱者救済のために必要です。3番目は、自然災害を理解するための情報で、自然災害が起こる仕組みや防災訓練などを取り上げております。まだ取りかかったばかりですが、私どもは浅間山の業務に関わり、訓練計画も兼ねて防災訓練の支援を行っています。また、40年にわたって培ってきた地形・地質の調査・解析技術を、地理情報システム（GIS）というツールを利用し、防災業務に活かしています。

平成19年の中越沖地震では、柏崎市の水道復旧情報のため通水復旧図を提供しました（図1）。これは、新潟GIS協議会と連携し、メンバーの一員である私どもと新潟県が加わり、実施いたしました。以上のような関わりで、長期間、毎日、わが社

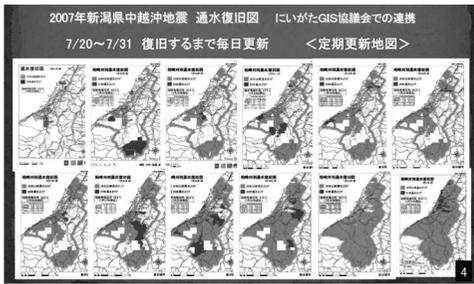


図1 災害発生時の情報提供の事例（新潟県中越沖地震）

では二人くらいが担当し、情報を迅速に市民へ提供していきました。文字データをこのように可視化することで、応急対策が順調に進められたと聞いています。

2.2 羽越豪雨災害の分析と教訓

ここ新潟市中心部から約20キロ東側にあります、五頭山という山で昭和42年に発生しました羽越豪雨災害の危険箇所解析を行いました。図の中で青くなっている部分が崩壊の危険度が一番高く、羽越豪雨では実際に崩壊しました。それから、河川が山から平野部に移る部分は扇状地となっています。

図2は、先日の広島での災害と同じで、花崗岩のマサ土が上にある様子を示す図なのですが、羽越豪雨災害時もマサ土が出てきました。特に、川を狭めて農地にしたり、あるいは宅地を作って川をいじめていたりということも、広島と同じ状況でした。広島では70名の死者が、羽越豪雨でも同数の死者が出ました。被害は羽越豪雨の方がより広い範囲でした。羽越豪雨は、今から45年以上前ですが、明らかに危険なところにみんな住んでいました。その後は同じような災害に遭わないように、集団移転し、安全な場所へ動いております。広島での土砂災害は、羽越豪雨と同じ花崗岩のマサ土によるものでした。行政は住民に注意するよう文書を配っていましたが、その程度ではだめで、前述のような大災害が起こってしまいました。約半世紀前の教訓は全国的には生かされなかったということです。

羽越豪雨災害では土石流が発生しました。五頭山には都辺田川という川があります。「都辺田」とはアイヌ語です。下流に集落があったのですが、前年

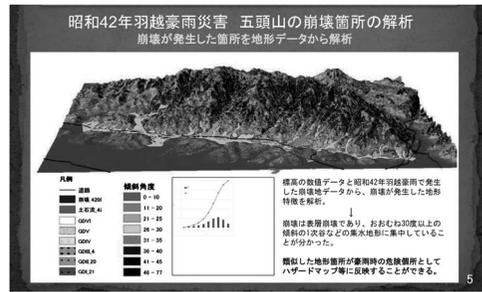


図2 災害発生に備えた危険箇所解析の事例（羽越豪雨災害）

にも災害があり、ここに緊急で砂防事業による堰堤を造りました。当時、私は新潟県庁の担当でした。この砂防堰堤が昭和42年の災害で飛ばされてしまい、コンクリートの塊がわずかに残っただけでした。下流にちょうど潜水艦が横たわるような格好で大きなコンクリートの塊がありました。砂防堰堤は、水で飛ばされたのではなく、上から流されてきた土砂や大転石が飛ばしたのだと思います。飛ばされてしまった砂防ダムは、右岸側が一部残っています。恐らく砂防ダムの上を5メートルから10メートルくらいの高さの土石流がやってきたのではないかと思います。花崗岩のマサ土を含む砂の水は、普通の水と違い、全体が液状化したように、ぐっと押し上げてきます。想像以上の大きな営力が働いているような感じがいたします。

羽越豪雨災害発生前後の同じ場所の写真がありますが、災害が起きる1か月前に撮った写真を見ると、土砂災害を何回も繰り返していることがよくわかります。発生してから1か月後の写真では、さらに扇状地が広がっています。恐らく広島の場合でも、同じような場所に宅地を造っていたのではないかと思います。羽越豪雨の時も、やはりそういう場所に住んでいた方は多く亡くなられました。都辺田川の下流にあった都辺田集落は、土砂ですべて埋まってしまったことがわかります。亡くなった方は現在でも何人かはまだ見つかっておりません。またそのほかの地区でも、同じようなことが起きております。

2.3 危険箇所の抽出と情報提供

前述のような災害を予防するために危険箇所を抽

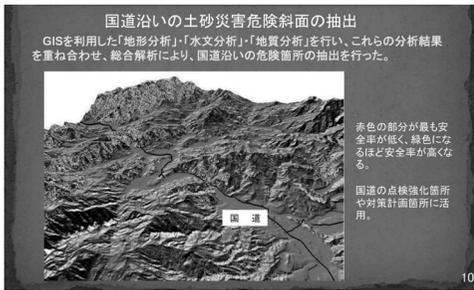


図3 災害発生に備えた危険箇所抽出の事例



図4 自然災害の理解のための情報提供事例 (富山県)

出した事例をご紹介します。図3は国道沿いの土砂災害危険斜面を抽出したものです。

国道沿いの斜面の赤い部分は安全率が最も低く、緑色になると安全率が高くなります。この地図を利用して、国道の点検強化箇所の対策をとるなど、色々なことに活用できます。

図4は、富山県の立山カルデラの一般的な地質図です。これは表土を剥ぎ、その下がどうなっているかをただ真上から見た状態で、一般の人には読み取れません。ところが、これを立体的に表現すると、一般の人でもよくわかるようになります。山の形や、あそこは土砂がたまっているな、とかわかるわけです。このような立体的に表現した地質図をこれからもっと利用して、普及していきたいと思っています。

私が防災業務を行ってきて一番感じることは、災害発生時の情報、それから災害発生に備えた情報、自然災害の理解のための情報蓄積と整理が重要であるということです。先ほど申し上げた通り、これらの情報は被害箇所、地形図や地質図、被害箇所の調査データ、過去の災害教訓等のさまざまな情報で

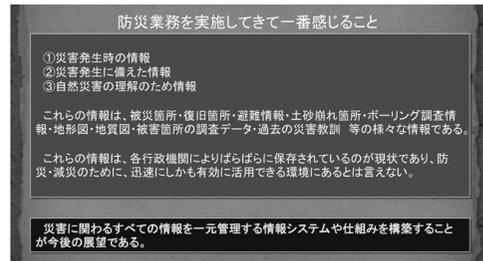


図5 情報システムを用いた防災業務の展望と課題

す。これらの情報は、行政機関によってばらばらに保存されているのが現状であり、防災・減災のためには、迅速に横のつながりを持って有効活用する環境を作っていく必要があると思っています。以上のことから、私どもはGISをデータベースのツールとして使った業務をこれからも発展させていこうと思っています(図5)。

3. 私と会社の歩み

3.1 地質学との出会い

さて、ここで話を変えまして私自身のことをお話したいと思います。私自身は、商売をものすごく大きくしようとか、何かで大儲けしようと考えたことは全くなかったことをまず申し上げ、今までどうやってきたかをお話します。

私は当時の社会的背景から、地質学を専門とする職には就けませんでした。と言いますのは、その頃ちょうど石油が輸入依存となり、国内での探査が必要ではなくなったため、石油会社は新規採用をしなくなりました。そこで仕方なく、私は、とりあえず民間に就職したわけです。それから、役所を通じて、自分の商売の道を歩んできました。

地質を調査する技術で商売を始めてからひよんな関わりで、地域間国際交流に足を踏み入れましたし、業協会団体や経済団体にも関与するようになっていきました。しかし、特にこれは自分の意思ではなく、仕方なくと言った方がよいと思いますが、受け身の形で行われたわけです。

崇高な考えを特に持っていたわけではないですが、いわゆる、TVでやっているプロジェクトXと

いわれるような確かな目的に挑み、欲のない控えめな行動と周囲の先輩、同期、後輩のお蔭で現在のようになったのだと思います。これから先は、現役としてそう長くはないと思っております。過去、あるいは現在はもちろん、この先の未来も、謙虚さを、そして常に感謝の気持ちを持って、完結に結びつけていきたいと思っております。現在のことを少々生意気ですが、ドキュメントにしていきたいと思えます。

私は四人兄妹の三番目に生まれました。妹は煙草を吸わないのに肺がんで最近亡くなりましたし、90歳近い元教員の姉、高齢のために開業医を辞めた兄、これが私の兄と姉妹です。地方公務員だった父親は薄給のため、この四人を育てるのは並大抵でなかったと思っております。そんな状況から、設立間もない、ちょうど8年目の新潟大学にお世話になりました。私は高校では文系科目が大好きでしたが、現役での合格の可能性が高い、地質鉱物学科に進みました。この学科の卒業生は、毎年石油会社に採用されており、私もそれを望んでおりました。それができなくなり、仕方なく公務員か、教師、そして当時流行り始めた大型電算機の会社などを模索しましたが、地質学を応用しているベンチャー企業を教授から紹介され、結構難しい試験を受け、入社しました。この頃地質学を専攻した人たちの多くは就職がなく、当時入社した時は、ほとんどが旧帝大で、新制の大学では私一人でした。そこで昼夜なく働いたことがその後のスキルアップにつながったと思えますし、後の商売を始めることに、結構役に立ったのではないかと感じております。

3.2 公務員から技術士として独立へ

その後、公務員になってから、2年ほど遅れて入庁したのに、公務員を辞める直前は大きな課の筆頭係長になっておりました。週のうちほとんど霞が関通いであり、新潟で過ごしたのは月半分くらいだったと思います。その時に、当時民間にいた同僚たちとどれくらい技術力の差ができていたのか試そうと思って受けたのが、技術士の試験でした。何とか合格しましたが、まさか商売をするとは考えてもいませんでした。県庁時代は「立場で物事を言うこと」、それから「筋には曲がり真っ直ぐの筋もある」ということを頭の中に入れて行動させていただきま

した。技術士の試験を受けたのはちょうど10年目の32歳でした。そして、中間管理職としては申し分のない日々を過ごしていました。しかし、昭和48年の正月、なんとなく辞めたくなり、退職を申し出ました。上司は驚きましたけれども、自分で辞めるのはしょうがないと認めてもらいました。全く無鉄砲なことでした。

当初、事務所はたまたま親戚が持っていた空き家を借りたのですが、とにかく資本金は400万円しかなく、収入はないしで、ガランとした事務所に差し込む春の日差しがやけに眩しく、本当に不安な気持ちになったことを今でもはっきり覚えています。最初は下請けを考えていましたが、どういうわけか県庁の付き合いや、色々な方が応援してくれ、下請けはほとんどせずに通常業務を受注でき、そして技術士事務所ではなく、一応、中小企業に仲間入りするようになったのです。すると、たった数年間でそのような状況でしたので、業界でのやっかみも受け、根も葉もない中傷が起きました。そのために無駄な時間を費やした時期もありました。今考えれば笑って済む話でもなかったかと思えます。

自分で申し上げるのもおかしいと思いますが、どちらかというと順風満帆で推移したわけですね。平成7年には、新潟県経済振興賞、それからまた日刊工業新聞社から地域貢献賞などをいただいて、平成10年には現在のジャスダックに上場いたしました。そしてまた、ISO9000の登録も当時ではこの業界や地域では最初でした。その後、公共事業パッシングが始まり、1年間で3億から5億ほど、受注が減り続けました。これは本当に大変で、結果的には、一番落ちたとき、谷間では受注額はピークの半分で、それでもリストラは行わず、人員の自然減と新規採用の中止、それから役員報酬のカット、賃上げを抑制して大幅に経費をつめ、しかし一期だけ赤字となりました。その時はそれに乗る形で、いわゆる不良資産といいますが、特別損失を計上し財務体質を強化しました。今のアベノミクスになってからは、半減した受注がわずかずつつですが、回復しているところですね。それでも、上場企業となって経済団体などの付き合いも相当にあります。極力冗費を節約し、その分を教育費にあて、社員の技術力向上に努めているところですね。

3.3 中国, ロシア, 東南アジア, そしてモンゴルへ

新潟^{かめだごう}に亀田郷土地改良区という団体があります。昭和54年頃、亀田郷から頼まれ、中国の一番北にある黒龍江省・三江平原へ、地質専門家として赴きました。その後、中国ODAとして認められ、私も地質部門を担当して、6億トンくらい大きなダム^{かめだごう}の一切の地質調査を行いました。技術移転も友好裡に行われて、会社からは4名ほどが延べで参加しております。そんな関わりもあり、黒龍江省政府との良好な関係で連絡先を現地に作りまし。そしてまた、合弁会社や独資会社も作りまし。2012年に満期で解散しました。相手からはまだまだやりましようと言われまし。私もあまりメリットがありませんでしたので、やめることにしました。そんなことで、中国への入国は100回をはるかに超えています。その間に、旧ソ連崩壊時はロシア極東への技術協力と資金を協力しました。韓国とは、日本技術士会を通じて毎年行われているフォーラムの日本側の責任者としてずっとやってまいりました。これも数年前に辞めたのですが、未だに、裏方で色々やらされております。

一方、東南アジア、ラオスやカンボジア等では、ミャンマーへの技術に関する技術移転についても、日本技術士会がらみで参加しました。このような実績を認められたのかは知りませんが、モンゴル政府の要請でモンゴル国名誉領事館を置くことになり、新潟県・新潟市と合意して、名誉領事に任命されました。自分で言うのもおかしいですが、当初は中国通だったので、モンゴル国名誉領事は希望したくなく、どうしてもとの命令で、引き受けたのです。最初は、ビザの発給もあり、実際にサインもしていました。現在はビザ不要となり、外国人と就労ビザ以外は必要ありません。もっぱら、今は技術協力や経済交流の橋渡しをしており、例えば、コシヒカリの精米工場設立のため、合弁の口利きをしたり、鉄骨の会社を現地の会社と結びつけたりすることができ、結構実績がついてきております。さらに、公益財団法人の新潟県国際交流協会の理事長をやってほしいとの話があり、引き受けました。「国際」と名の付くものはみんな回ってきて困っております。これもまあ、社会貢献の1つだと思っています。

3.4 知足美術館の建設と文化活動の展開

会社は企業規模に応じて、社会に貢献すべきと思っておりまし。平成7年に本社を移転したときに美術館を別棟に建設しました。ハワイのオアフ島に行った方はご覧になったことがあると思いますが、アリゾナ記念館みたいな長い建物です。知足美術館と命名して、現在までやってきております。作品はあまり意識的に収集したことはありませんが、広重の東海道五拾三次を、私が個人で購入して渡したくらいです。美術館は、中国や韓国、北朝鮮の山水水墨画なども所有しており、地元のメディアがいつも応援してくれますので、少しずつ知名度も出てきております。

それだけでなく地方都市には珍しい有名オーケストラの特別協賛も行いました。ベルフィル（ベルリン交響楽団）あるいはスロバキア（スロヴァキア・フィルハーモニー管弦楽団）、その他にもたくさんやりまし。

文化講演会としてお坊さんの講演も結構やっております。例えば、金閣、銀閣の相國寺の管長さんや薬師寺の管長さんらをお呼びしました。文化人では新井満さんや北野大さんに来ていただきました。北野大さんとはアフターファイブでも楽しくお付き合いしました。さらに、上智大学の元学長である石澤先生とはずっとお付き合いがあり、先生がこちらに来られるときは必ずお電話をいただきますし、ご講演の後には夜遅くまでお酒を楽しんでおります。

3.5 社会貢献活動

色々なことをやってきておりますが、他にできることはないかと思ってやってきたのが知足常楽会という社会福祉法人です。これからは高齢化が進むということで、設置しました。社会福祉法人をつくるのは大変でした。当時は、社会福祉法人でなければケアハウスはできませんでした。ちょうど、浮きが沈んだり水面から出たりするような状態で、採算が取れたりマイナスだったりすることがあり、その時は、少し寄付をしたりしています。入居者はほとんど女性で現在満室です。在宅介護も行っていますが、これは私の分野ではないのでよくわかりませんが、今後は特別養護老人ホームの建設も考えていますが、少なくとも10億から20億かかるので、投資額が莫大でちょっと躊躇しているところです。

この他には、産業地質科学研究所を設立し、会社の収益部門ではない専門部門で色々やってきました。当初は、地盤情報収集を目的にやっていましたが、今は公的機関が大体やっておりますので、この前の公益法人制度の改正の時に会社に吸収して解散しました。基金は前述の社会福祉法人の方へ寄付し、環境関連業務の研究は当社でやっております。

4. 経営者の資質とあるべき姿

4.1 努力と天の時・地の利・人の和

私自身、決して地質が好きでこの道に入ったわけではなく、仕方なくこの道に入って、純粋な地質学からはずれた土木地質を生涯の仕事としたわけでございます。民間会社では本当に大変でした。文京区の駒込にありまして、そこからいつも江東区の夢の島へイベントナイトがこびりついた作業服で、都電に乗って通っていました。そこから帰るとき、都電は必ず銀座を通るのですが、繁華街を同年の洒落た若者たちが闊歩していて、それをなんとなく羨ましく思っていました。また、上半身裸で「シノ」を片手に東京湾で、ボーリングの足場の組み立てをやったこともあります。これは相当、今の生涯にプラスになったと思ひ、良かったなと思っております。新潟県庁の最初の職場がちょっと合わず、生意気ですが転職を申し出ました。次のところが非常に良く、合っていたのですが、勝手にやめてしまったのはまずいことではなかったかと思っております。商売を始めてからは自ら進んだ道で、苦労はすべて自分のものになったと思っておりますが、ベースとなる地質関連の学会を自ら設立したことや、業協会からは助けられたと思っております。

また、業界団体の幹部や日本技術士会からも本場で副会長などの要職に就かせていただいたため、一生懸命やりました。その後、地元の経済界からも注目されるようになり、新潟商工会議所や新潟経営者協会に加わり、新潟経済同友会では代表幹事も長く務めました。そんなところで、実際、私どもよりも10倍くらいの規模の会社が新潟では結構ある中で、皆さんが大切にしてくれるということは本当にありがたいと思っております。

その間、叙勲や、海外からも賞をいただいたのですが、何よりも嬉しかったのは、地道な国際交流、

福祉社会貢献が認められ渋沢栄一賞をいただいたことであります。こんなことは、恐らく地質学専攻者ではできなかったのではないかと感じております。要は努力半分、半分は運、これで1となっているのではないかと思います。その意味でも学んだ地質学を蔑みながら進んだ自分を恥じるとともに、専攻ではなく、あくまで自分自身が行う努力を人が認めてくれるということを悟り、天の時、地の利、人の和、これに感謝するという気持ちでおります。迷走し続けている私のプロジェクトXは永久に完結しないのです。

世の中の技術の発展度合を時代別に見ていくと、技術者から見た場合、紀元前の頃はなんとなくヒューマニティな時代、それからルネッサンスが起きて文化的発展を遂げ、18世紀の産業革命から石炭から石油、天然ガスに代わって、現代に至るまで急激なカーブとなっております。現代は、本来なら原子力と言いたいところですが、今は少々言いにくい状態ではあります。考えてみると、世の中の発展のカーブが変わること自体がなんとなく不安に感じるということがよくわかると思ひます。ここにきて、20世紀の急激な経済発展が、不安要素になってきたのではないかと推測しています。そして3.11の東日本大震災は、今から10数年くらい前の20世紀の終わりから大きな不安要素があったのではないかと思います。これらのことを頭に入れておきながら技術者はある程度、節度を持って技術の発展に取り組まなければならないと思っております。

4.2 自分の過去を振り返り、そして感謝

私はいつも、自分の歴史というより過去を振り返ることは大事なことでと考えております。困ったとき、悩んだとき、小学校以前はどうであったか、家族やしつけや養育はどうだったか。小学校の時は先生のしつけ、趣味が少し出てくる中学校の時はクラブ活動の上下関係や礼儀作法など、その中で自分の役割や競争心の違いとか、勝負の執着なんかも出てくるのではないかと思います。高等学校に入りますと、希望大学のための勉強があり、大学では、アルバイトとの出会い、4年間の基礎教育と専門教育があり、どうやって行ったか、そのとき誰と出会ったか、誰のお世話になったかを思い返してみると、悩んではいけないわけでありませう。

それから商売をやってみまして、やはり何かというところ要素、客よし・土地よし・店よし、これはもうおわかりだと思いますけれども、感謝があって、そこで真のつながりできる。これは、天地人ということ。3つきちっと結び合うと成功するのではないかと思っています。商売を始めるときに市場と技術がありますが、これだけではダメで、資金が必要であり、資金とはなんだろうと言ったら、これは人との関わりで決まってくる。人物が最も大事だよと言いたいわけです。

私のキーワードですが、商売には常に熟慮が必要であり、熟慮して可能なものはすべて実施すると、そこには「勇氣」、「決断」、「洞察」そして常に「謙虚」があります。さらに自分に厳しく、自分一人くらい、自分だけは、という裸の王様への道を未然に防いでくれます。それから常に考えているのは「足るを知る」です。禅林句集の中にもありますように、己の分際をわきまえ、むさぼりの気持ちを持たないということです。あとは、感謝の気持ち、こだわりを捨てる、まわりに寛容な態度、人の話に傾聴することを常に考えながらやっていけばいいと思い、また、実際にやってきたつもりです。

これについては、フロリダにあるディズニー研究所では世界各地の企業の人たちを教育していますが、ディズニー研究所の7つの法則に、「すべての人が、語りかけ、歩み寄り」というものがあります。これはどういうことかという、外国人の女性は背が高いですが、そこに小さな3歳くらいの子が下にいます。背の高い女性が上から「お嬢ちゃんどう？」と言われたら、これは怖がってしまいます。同じ目線にならなきゃダメですよということです。また、「誰もがキーパーソン」という言葉があります。分担して行ったことは自分が責任者で主役という意識を持つことは大事ではないかと思ひ、できるだけ社内では行っています。

4.3 組織の垣根は飛び込めばいい

集団というのは壁を作ってしまう。そうすると、オレタチ意識ができてしまい、よそから入ってくるものは敵視するという考えが起こります。常々、色々な派閥があると思いますが、さまざまなことをよく理解しながらやらなければならない。垣根があるところにおいては逆に飛び込んで行ったら

垣根はない、仕方なくかもしれないが必ず入れてくれます。するとその中の一員になっていきます。ですから、彼らのグループには入れないと思わず、トライしてみることが大事ではないかと思ひます。この垣根を作りすぎたのが福井のもんじゅの例です。ナトリウム漏れが起きたとき、あまりにも自分たちで固めすぎた。自殺者が何人か出たと思ひますが、その後、あの組織は解体されたという。あまりオレタチ意識はよくないという例です。

私が社内への対応で心がけていることは、世の中の経済問題からくる社会不安からの解消への努力とか、動揺を与えないなどありますが、やはり最後には、終身雇用の時代ではないといわれていることは承知で、「経営と技術に優れた企業が自由に伸びられ、優れた人材が生涯を託せる企業」を最終目的に掲げております。

4.4 経営者の資質

企業家というのは、偶然成功したり、性に合っていたり、素晴らしい友人や先輩たちに恵まれて商売に成功する場合があります。そうすると、これまでのことはすっかり忘れて、ほとんどの人たちが自分自身の実力であると思ってしまうことが多いです。これが一番問題ではないかと思ひます。成功すると他人の力であることをすっかり忘れ、先人、恩人たちの忠告に耳を傾けなくなる人が結構います。やはり「実るほど頭を垂れる稲穂かな」は商売をやる者にとって、産声を上げてから成功して上場し、本人が引退するまで大切な言葉であると思ひています。

私は、江戸時代の人である佐藤一斎の真髓十七カ条という言葉に全く異論がなく、社内の幹部にはいつも実行させています。

[佐藤一斎の真髓十七カ条]

- 第1条：重職は、それにふさわしい威厳が必要である。
- 第2条：重職は、自分の好みでない部下をこそ尊重して使え。
- 第3条：重職は、時に応じて、改めるべきことを改めよ。
- 第4条：重職は、前例や規則にとらわれてはいけなない。
- 第5条：重職は、チャンス逃してはならない。

- 第 6 条：重職は、渦中のみこまれてはならない。
 第 7 条：重職は、無理強いや押しつけをしてはならない。
 第 8 条：重職は、忙しいと言ってはならない。
 第 9 条：重職は、託された重大な権限は自ら執行せよ。
 第 10 条：重職は、目先の事にとらわれてはならない。
 第 11 条：重職は、広く大きな心を持つ。
 第 12 条：重職は、他人の意見にも謙虚に耳を傾けよ。
 第 13 条：重職は、部下同士の調和に心を配れ。
 第 14 条：重職は、仕事に手をかけすぎてはいけな
 い。
 第 15 条：重職は、裏表があってはならない。
 第 16 条：重職は、公開すべき情報は公開せよ。
 第 17 条：重職は、部下の気持ちを明るく保たなければなら
 ない。

出典 重職心得箇条 真髓十七箇条
 (佐藤一斎より)

ここからはついでの話なのですが、日本を代表する経営者の資質ってなんだろうって、大胆で斬新、理想主義的である反面、現実的、温かさを持つ反面、冷たさと静けさを持つ。直感的で想像力を持つ反面、仕事の締めくくりが明確である、若いときと変わらぬ意欲・気概を持っていることであります。私見ではありますが、私はいわゆる初代の経営者があまり好きではありません。なぜなら、成功談義(自慢話)、個性の強さ(自分の考えにこだわる)、持論の固執(押し付け)といった特徴があるからです。お前はどうかと言われたら、私は個人の技術士事務所が少々大きくなったという意識です。業界では一流でも、わが社は地質では全国でトータル 10 番くらいになると思いますが、これくらいの規模では経済界ではマイナーで相手にされません。新潟経済同友会など、経済団体で重用されたのは、会社の知名度や規模などではなく、やはり付き合っている人のお蔭ということでしょう。

私が今までしてきた社会貢献は、これはあくまでも貧者の一灯なのです。それには、思いやりや、いたわり等を、できる範囲で無理なく行ってきました。寄付というものを日本人はあまり好きではない

のですが、私もあまり高額ではないですが、ある大学に 6 年ほど一定額を寄付しています。今後も続けますが、可能なら利益の一定額を出すべきであると感じています。私はそこまでいけるとは思っていますが、それがやがて長者の萬灯になっていくと思っ
 ています。

5. おわりに

最後に人生での成功とは、振り返ってみて悔いがないと思うことであります。後悔することがない人生。そして大きな失敗のない人生。したがってこれらはたいしたことではないわけです。今、迷っていてもそこで一寸でも気づいたことをやってみる。そのうちに本質が見えてくる。そうしたら、それを命がけでやること。ふと、後で気が付くと自分では気づかないが、成功していたりします。つまり結果は後でついてくるのであります。そんなに大きなことではないが、やはり人生にとって嬉しいことであります。これこそが冥利(私にとっては地質冥利)なのではないかと思
 います。

御清聴ありがとうございました。

略歴

中山 輝也(なかやま てるや)

昭和 31 年 3 月 新潟県立新潟高等学校 卒業

昭和 35 年 3 月 新潟大学 理学部 地質鉱物学科 卒業

【職歴】

昭和 35 年 4 月 応用地質(株)

昭和 36 年 12 月 新潟県

昭和 48 年 4 月 北日本技術コンサルタント(株)(現(株)キタック 代表取締役)

平成 7 年 10 月 公益財団法人知足美術館 理事長・館長

平成 15 年 10 月 ホテル日航新潟 取締役

平成 18 年 3 月 社会福祉法人知足常楽会 理事長

平成 23 年 5 月 (株)新潟放送 監査役

【現在の主な経歴】

平成元年 12 月 NPO 法人新潟県対外科学技術交流協会 理事長

平成 15 年 5 月 一般財団法人新潟経済社会リサーチセンター 理事

平成 18 年 11 月	NPO 法人美しい水辺, 緑, 大地を考 えるフォーラム 理事長	平成 7 年 3 月	新潟県経済振興賞
平成 19 年 5 月	新潟県博物館協議会 副会長	平成 7 年 4 月	国務大臣 科学技術庁長官表彰 (科学 技術振興功績者)
平成 19 年 7 月	在新潟モンゴル国名誉領事館 名誉領 事	平成 9 年 1 月	日刊工業新聞社 (地域貢献賞)
平成 19 年 12 月	公益財団法人新潟県国際交流協会 理 事長	平成 11 年 9 月	新潟市 (市長感謝状・市制 110 年経 済振興功績)
平成 22 年 9 月	公益財団法人環日本海経済研究所 (ERINA) 評議員	平成 15 年 10 月	国土交通省総合政策局 (局長感謝状)
平成 23 年 9 月	公益財団法人日本技術士会 参与・北 陸本部 名誉本部長	平成 19 年 11 月	叙勲・旭日双光章
平成 24 年 4 月	新潟経済同友会 特別幹事 (代表幹事 平成 17 年 4 月~平成 24 年 4 月)	平成 20 年 2 月	韓国政府副総理兼科学技術部長官賞
平成 24 年 11 月	新潟県護国神社 総代	平成 23 年 1 月	渋沢栄一賞 (埼玉県・渋沢栄一財団)
【主な受賞】		平成 24 年 7 月	叙勲・モンゴル国大統領ナイラムダ ル友好章
昭和 58 年 8 月	中国政府農牧部 黒龍江省人民政府 (感謝状)	平成 24 年 7 月	モンゴル国外務大臣表彰
		平成 24 年 10 月	韓国大邱広域市 (市長感謝状) (平成 26 年 10 月現在)